

# 令和7年度 新潟県 英語教育改善プラン

## 児童が「学ぶ楽しさ」「分かる喜び」を実感できる外国語の授業づくりの推進

○外国語の授業の参観や協議を行う学校の割合 (R6:68.3% ⇒ R7:80%) ...「言語活動を通して指導する」の実現

○外国語の評価の共通理解を図る取組を行う学校 (R6:37.2% ⇒ R7:50%) ...「指導と評価の一体化」の実現

※それぞれ新潟県教育委員会実施「小・中学校教育課程の編成・実施状況等に関する調査」にて検証

### 目標

- 言語活動
  指導と評価の一体化
  教師の英語力・指導力
  校種間連携
  ALTの参画
  ICTの活用
  AIの活用
  その他

(パフォーマンステスト含む)

(専科教員含む)

(AIを除く)

### 1. 目標に対する現状

#### 改善が進んだ点

- ①CAN-DOリスト形式による学習到達目標について、以下の学校の割合が増加
- ・設定 (R4:83.4%⇒R5:89.6%)
  - ・公表 (R4:59.9%⇒R5:69.1%)
  - ・達成状況の把握 (R4:80.4%⇒R5:81.3%)
- ※それぞれ上記数値は参考
- ②外国語の授業の参観や協議を行う学校が増加 (R5:50.2%⇒R6:68.3%)

#### 未だ改善が必要な点

- ①外国語の評価の共通理解を図る取組を行った学校の割合が低下 (R4:42.5%⇒R5:38.5% ⇒R6:37.2%)
- ②「言語活動を通して指導する」の理解が十分でなく、言語活動の実施やその内容に課題が見られる。

### 2. 要因分析

- ①小中高の「新潟県英語スタンダードズ」(CAN-DOリスト形式による学習到達目標)を作成して各校に配付し、実態に合わせて各校で作直していくことを伝えた。
- ②令和6年度に教科書が新しくなり、それに伴い外国語の授業づくりについての意識が高まったことが要因と考えられる。

①②指導と評価の一体化の重要性についての教師の認識が高まっている一方、各学校である程度授業の進め方や評価の方法が確立されてきている状況や、小規模の学校で外国語を担当する教員が少なく、授業や評価について相談する相手がいない状況が要因であると考えられる。

### 3. 目標を達成するための施策・事業

①②「外国語授業づくりオンラインワークショップ」を行い、「言語活動を通して指導する」の具体例、小中学校の実践の優良事例を共有する。

①②「小学校外国語実践講座」(80名参加)および「小学校英語専科教員情報交換会」(地区ごと、県で55名)を行う。教師の意識向上を図るとともに、教師同士の横のつながりを大切にして、教材やパフォーマンステストに関するアイデアを共有できるようにする。また、教科教育専門監・英語教育推進リーダーを活用し、各地区で授業づくりや授業改善の向上を図る。

②「英検ESGを活用した児童生徒の英語力向上事業」を行うことで、児童の英語発話を促すとともに、児童の意欲向上を図る。

②「新潟県学校教育の重点」に基づき、児童が外国語の授業やその中の言語活動で「学ぶ楽しさ」「分かる喜び」を実感できるよう、言語活動の在り方について研修会等で周知する。

○一定の英語力を有する教師を採用できるよう、TOEICやTOEFL iBT、実用英語技能検定等で一定の成績を有する場合に、教員採用選考検査の一次検査で加点を行う。

参考URL (新潟県学校教育の重点) : <https://www.pref.niigata.lg.jp/site/kyoiku/1194624921508.html>



# 令和7年度 新潟県 英語教育改善プラン

## 生徒が「学ぶ楽しさ」「分かる喜び」を実感し、英語力を高められる授業づくりの推進

### 目標

- CEFR A1(英検 3 級程度)の英語力を有する生徒の割合 (R6:47.8% ⇒ R7:55%) ※(A)
  - 外国語の評価の共通理解を図る取組を行う学校の割合 (R6:74.5% ⇒ R7:80%) ※(B)
- ※「英語教育実施状況調査」(A)、および新潟県教育委員会実施「小・中学校教育課程の編成・実施状況等に関する調査」(B)にて検証

- 言語活動
  - 指導と評価の一体化
  - 教師の英語力・指導力
  - 校種間連携
  - ALTの参画
  - ICTの活用
  - AIの活用
  - その他
- (パフォーマンステスト含む) (AIを除く)

### 1. 目標に対する現状

#### 改善が進んだ点

- ①英語の授業参観や協議を行う学校の割合が増加 (R5:85.6%⇒R6:96.4%)
  - ②CEFR B2の英語力を有する英語教師が増加 (R5:49.2%⇒R6:49.8%)
  - ③小学校と連携している学校が増加 (R5:66.5%⇒R6:71.5%)
- ※②… (A)、①③… (B)

#### 未だ改善が必要な点

- ①CEFR A1の英語力を有する生徒が減少 (R5:49.2%⇒R6:47.8%)
  - ② 5 領域に関する言語活動についての取組状況がまちまちである。※以下R6全国学力・学習状況調査結果
- 聞くこと…94.5%
  - 読むこと…96.2%
  - 話すこと[やり取り]…79.3%
  - 話すこと[発表]…88.4%
  - 書くこと…92.5%

### 2. 要因分析

- ①英検IBAを全中学校・義務教育学校で実施し、その結果を受けて各校で授業改善を図った。また、県で作成した教材を年間 5 回配信し各学校の授業内で活用する「にいがた学びチャレンジ」により、各校で思考力、判断力、表現力等の育成に努めた。

①②学習指導要領の内容や「言語活動を通して指導する」の理念の理解が不十分であり、授業が旧態依然のままである教員もいるようである。言語活動の場が十分でないことで、「英語が伝わった」「英語が理解できた」という経験が少ないことが予想される。

①定期テスト等のペーパーテストも旧態依然のままであり、学習指導要領で求められている資質・能力を適切に見取ることができていない学校がある。

### 3. 目標を達成するための施策・事業

①②「新潟県学校教育の重点」に基づき、英語学習に対する生徒の興味・関心の向上をねらいとした「Students Enjoy English (SEE) Project」という事業を令和6年に開始した。県内全164校の中学校を2グループに分け、2年間で以下の取組を交互に行う。

- ・英語科主任研修…「指導と評価の一体化」を意識して評価の検討（自校のテストを持ち寄って協議）や単元の計画立てを行うとともに、公開授業の参観を踏まえて授業改善に向けた検討を行う。
- ・全中学校訪問…英語科の授業参観と、「言語活動の充実」「指導と評価の一体化」など学校ごとに選択されたテーマについて個別研修を行い、英語教師の困り感の把握と授業改善を図る。

①②英検IBAの活用…「聞くこと」「読むこと」の力を伸ばすための授業づくりの在り方を検討するとともに、客観的指標でその力を見取る。

①②「にいがた学びチャレンジ」を活用した授業改善…「話すこと」「書くこと」「読むこと」の言語活動を充実させ「英語が伝わった」「英語が理解できた」という生徒の経験を増やすことができるようにする。

②外国語授業づくりオンラインワークショップ…言語活動の充実に関する小中学校の授業実践の共有を行う。

参考URL（新潟県学校教育の重点）：  
<https://www.pref.niigata.lg.jp/site/kyoiku/1194624921508.html>



# 令和7年度 新潟県 英語教育改善プラン

## 目標

授業中の言語活動の一層の充実により、生徒の英語力を向上させる。

○授業中、50%以上の時間、生徒が言語活動を行っている学校の割合を65%にする。

○CEFR A2（英検準2級程度）の英語力を有する生徒の割合を55%にする。（R6：49.1%）

CEFR A2/B1レベル相当以上の英語力を取得又は有すると思われる生徒の割合

（R6：A2以上 49.1%、B1以上 19.2% ⇒R7：A2以上 55%、B1以上 25%）

言語活動  指導と評価の一体化  教師の英語力・指導力  校種間連携  ALTの参画  ICTの活用  AIの活用  その他  
(パフォーマンステスト含む) (AIを除く)

## 1. 目標に対する現状

### 改善が進んだ点

- ①CEFR A2レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合が増加した。  
R5:45.3%⇒R6:49.1%
- ②授業における、生徒の英語による言語活動を行っている学校の割合が増加した。  
R5:45.8%⇒R6:47.4%

### 未だ改善が必要な点

- ①教師の英語力・指導力について、CEFR B2レベル相当以上を取得している教師数の割合が減少した。  
R5:83.5%⇒R6:78.2%
- ②スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した割合が減少した。  
R5:44.5%⇒R6:41.5%

## 2. 要因分析

- ①英語能力に関する外部試験を受験したことがある生徒の割合が増加したことも要因と考えられる。
- ②年に2回実施する英語発信力育成研修及び教科研究研修等で、様々な言語活動に取り組んでいる教員の事例を示したことで、割合が改善したと考えられる。

- ①英語資格・検定試験等を受験した教員数が、減少したことが一因と考えられる。
- ②パフォーマンステストについて、生徒の言語活動を適切に評価していないことが要因と考えられる。また、科目によって、「書くこと」しかパフォーマンステストを実施していない学校があるためだと考えられる。

## 3. 目標を達成するための施策・事業

- ①授業改善  
英語を学び続ける意識を、授業及びその他の学習で身に付けさせるため、主体的に学習に取り組む態度を適切に評価するよう、研修の機会に具体例を用いて伝える。
- ②「AIの活用による英語教育強化事業」の推進  
本県は、令和6年度「小・中・高等学校を通じた英語教育強化事業」（AIの活用による英語教育強化事業 / AI英語モデル校事業・AI英語活用リーダー事業）において、モデル校3校でAIを活用し、生徒の話す力を育成したいと考えている。この事業の取組や課題を、校種を越えて発信し、教員が負担を感じない言語活動を示し、取り組みやすい言語活動を示していく。
- ③「小・中・高等学校教員を対象とした英語資格・検定試験の特別受験制度」の推進  
研修の度に声をかけ、教員に外部検定受験に意識を向けさせる。教員の授業中の英語使用率が低い現状を伝え、生徒が理解できる英語を用いて授業するためにも、教員の英語力向上は必須であることを伝え、受験を促進する。
- ④パフォーマンステストの充実  
AIを活用することで、教員の負担を減少できる事例を示し、パフォーマンステストは大がかりなものではなく、単元ごとに、目的に合った内容で実施するよう示す。

新潟県教育委員会

校種	指標内容	2023		2024		2025		2026		2027		
		目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	
高等学校	①CEFR A2レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合(%)	60	45.3	50	49.1	55		60		60		
	①CEFR B1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合(%)	30	16.4	20	19.2	25		30		30		
	②授業における、生徒の英語による言語活動の割合(%)	80	45.8	60	47.4	65		70		80		
	③スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した割合(%)	70	44.5	60	41.5	65		70		80		
	④「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定(%)	100	93.2	100		100		100		100	
		公表(%)	90	48.9	60		70		80		90	
		達成状況の把握(%)	90	46.6	60		70		80		90	
⑤CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合(%)	60	83.5	85	78.2	85		90		90			
⑥英語担当教員の授業における英語使用状況(%)	75	28.8	50	33.1	60		70		75			

校種	指標内容	2023		2024		2025		2026		2027		
		目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	
中学校	①CEFR A1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合(%)	60	49.2	50	47.8	55		60		65		
	②授業における、生徒の英語による言語活動の割合(%)	80	64.9	80		80		80		80		
	③スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した割合(%)	100	85.1	100		100		100		100		
	④「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定(%)	100	99.4	100		100		100		100	
		公表(%)	90	71.7	90		90		90		90	
		達成状況の把握(%)	90	83.2	90		90		90		90	
	⑤CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合(%)	60	49.2	50	49.8	55		55		60		
⑥英語担当教員の授業における英語使用状況(%)	80	54.6	80		80		80		80			

校種	指標内容	2023		2024		2025		2026		2027	
		目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
小学校	「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定(%)	100	89.6	100		100		100		100
		公表(%)	80	69.1	80		80		80		80
		達成状況の把握(%)	90	81.3	90		90		90		90